保育器管理中の児をもつ親の役割葛藤に及ぼすオムツ交換参加の有効性

＊キーワード：保育器管理　　オムツ交換　　親役割葛藤

1病棟4階東 総合周産期母子医療センター
岡本知子　山本亜矢　永田由美子　三木砂織　三輪静江　下川千鶴

Ⅰ．はじめに

NICU(Neonatal Intensive Care Unit)では早産児をはじめ多くの新生児が保育器管理中であり、親子が分離状態となる。仁志田は「新生児期全体にわたる母子接触の濃度が、後々の母子関係の確立に重要な意味をもっている」[1)]と述べており、A 病院総合周産期母子医療センターでも早期から親子の接触を促すためにタッチングや母乳の口腔内塗布、カンガルーケアなどを取り入れている。しかし多くの親から「不安」「怖い」「申し訳ない」「もっと何かしてあげたい」と親役割葛藤を示す訴えがあった。堀内は親を「なにもできない親として位置づけるのではなく、子どもをケアし、成長発達を助けるチームの一員として役割を分担しうる重要な存在として認識することが医療者には必要である」[2)]と述べていることから、親が児へケアする機会を増やすことにより親役割葛藤軽減につながらないかと考えた。これまでに保育器管理中の児を持つ親のオムツ交換参加により親役割葛藤が軽減するかを明らかにした先行研究はない。そこで今回われわれは早期から親子が接触できるオムツ交換を取り入れ、親のオムツ交換参加が親役割葛藤軽減に有効であるかを明らかにしたのでここに報告する。

Ⅱ．目的

保育器管理中の児に対して親のオムツ交換参加が親役割葛藤軽減に有効であるかを明らかにする。

＜用語の定義＞

親役割葛藤とは危機に反応した役割葛藤の体験（不安・恐怖・罪悪感・欲求不満）のことである。

コット移床とは児が保育器から新生児用ベッドに移ることである。

Ⅲ．方法

1. 研究期間：2011年8月～11月
2. 対象：研究期間中にA病院総合周産期母子医療センターに入院している以下の基準をすべて満たした児の親 26名（父 10名、母 16名のうち初産婦 8名、経産婦 8名）。

＜適格基準＞

1）研究に参加する親の同意がある
2）出生週数36週未満の児の親
3）閉鎖・開放式保育器管理中の児の親
4）酸素投与23%以下（N-CPAP：nasal continuous positive airway pressure、N-DPAP：nasal directional positive airway pressure 装着中でも可）であり全身状態が安

定した児の親

＜除外基準＞

1) 挿管中の児の両親
2) コット管理中の児の両親
3) 動脈ライン確保中の児の両親
4) 下肢の疾患がある児の両親
5) 研究者及び児の担当医が研究の対象として不適格と判断した児の両親

3．実施方法

1) 看護師のオムツ交換を見学後、安全確保のため看護師見守りのもとで親がオムツ交換に参加した。
2) オムツ交換参加前とコット移床後に独自に作成したアンケート用紙を用いて親にアンケート調査した。
3) アンケート結果の『児に対する想い』ポジティブ項目８項目・ネガティブ項目８項目、『オムツ交換に対する印象』ポジティブ項目３項目・ネガティブ項目３項目（表1）を点数化して平均値を算出後、単純集計後両側 t 検定（$P<0.05$）を行い、全体・父母・産科歴ごとに検討した。

表１．アンケート項目

	児に対する想い	オムツ交換に対する印象
ポジティブ項目	可愛い	うれしい
	うれしい	
	安心	楽しみ
	楽しい	
	愛おしい	
	守ってあげたい	できることがある
	そばにいたい	
	触りたい	
ネガティブ項目	もっと何かしてあげたい	難しい
	不安	
	つらい	不安
	怖い	
	悲しい	
	申し訳ない	怖い
	実感がわかない	
	何も考えられない	

4．倫理的配慮：A 病院医薬品等治験・臨床研究等審査委員会で承認を得た。

Ⅳ．結果

1. 全体について

アンケートの回収率はオムツ交換参加前 100%（26 名）、参加後 88%（23 名）であった。『児に対する想い』のポジティブ項目 5 項目が増し、3 項目はわずかに低下したが有意差はなかった。またネガティブ項目 6 項目が有意に低下した（図 1）。しかしネガティブ項目の「もっと何かしてあげたい」は参加前後で変化がなかった。『オムツ交換に対する印象』では全てのネガティブ項目が有意に低下した（図 2）。

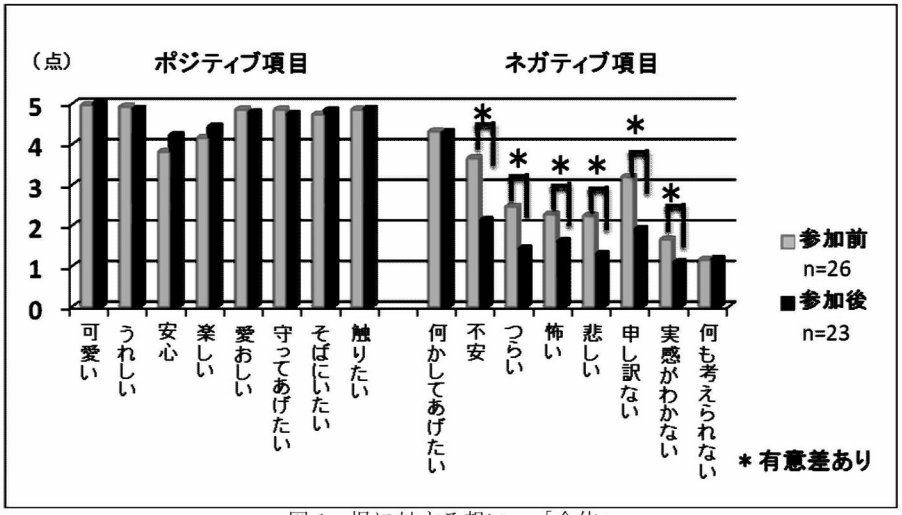

図 1．児に対する想い　「全体」

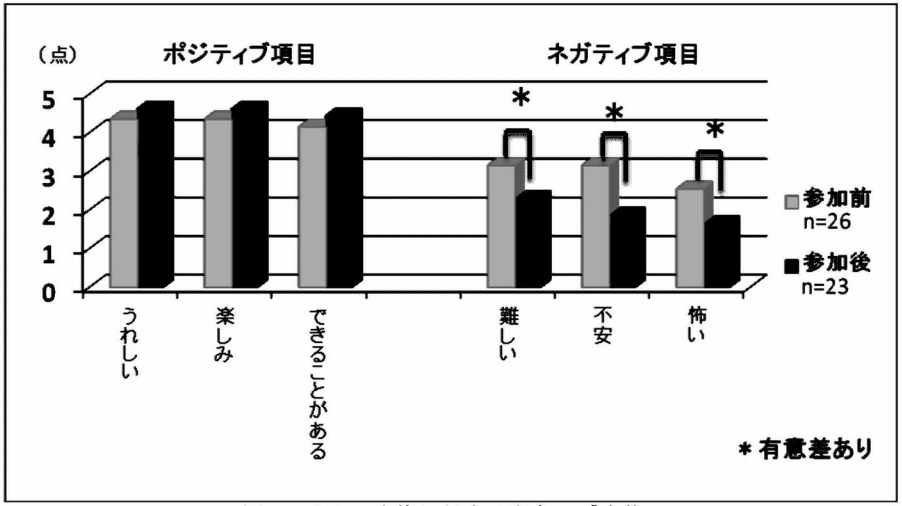

図 2．オムツ交換に対する印象　「全体」

2. 父と母について

アンケートの回収率は母がオムツ交換参加前 100%（16 名）、参加後 88%（14 名）、父が参加前 100%（10 名）、参加後 90%（9 名）であった。母は『児に対する想い』のポジティブ項目が父に比べて強く、ネガティブ項目 5 項目が有意に低下した（図 3）。父はネガティブ項目 2 項目が有意に低下した（図 4）。『オムツ交換に対する印象』では父母ともに全てのネガティブ項目が低下した（図 5、6）。しかし父はネガティブな想いは低下したが母に比べて依然高値という結果がでた。

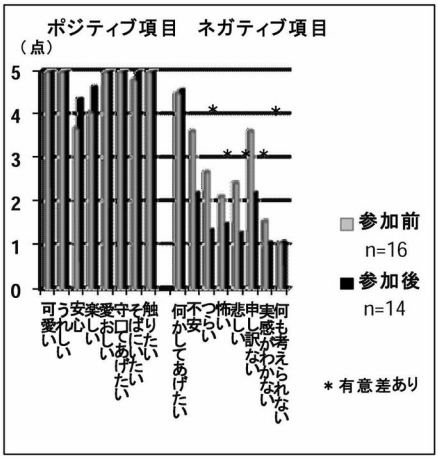

図 3. 児に対する想い　「母」

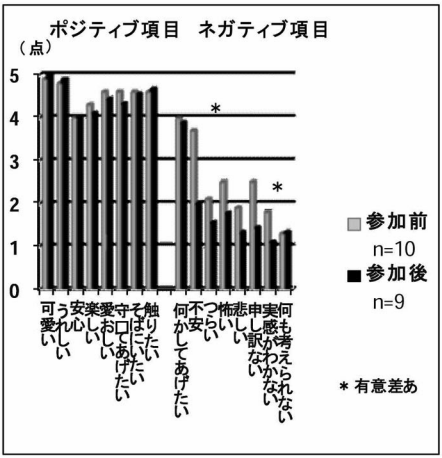

図 4. 児に対する想い　「父」

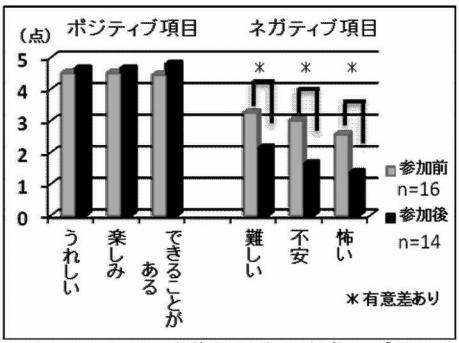

図 5. オムツ交換に対する印象　「母」

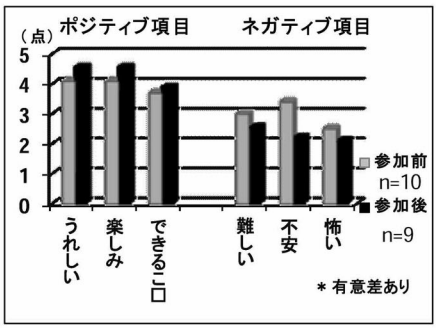

図 6. オムツ交換に対する印象　「父」

3. 初産婦と経産婦について

アンケートの回収率は初産婦がオムツ交換参加前 100%（8 名）、参加後 88%（7 名）、経産婦が参加前 100%（8 名）、参加後 88%（7 名）であった。初産婦は『児に対する想い』のポジティブ項目が経産婦に比べて強く、ネガティブ項目 4 項目が有意に低下した（図 7）。経産婦はネガティブ項目 1 項目が有意に低下した（図 8）。『オムツ交換に対する印象』では初産婦、経産婦ともに全てのネガティブ項目が低下した（図 9、10）。また

初産婦は参加前ではネガティブな想いが経産婦に比べて高値という結果が出た。

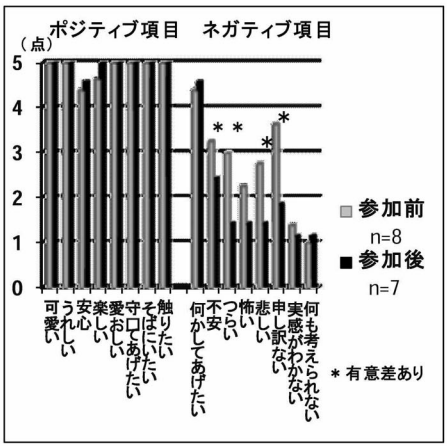

図 7．児に対する想い　「初産婦」

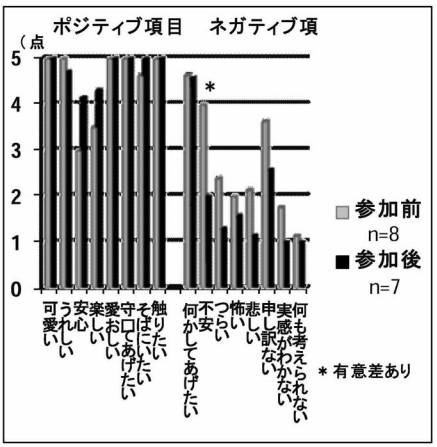

図 8．児に対する想い　「経産婦」

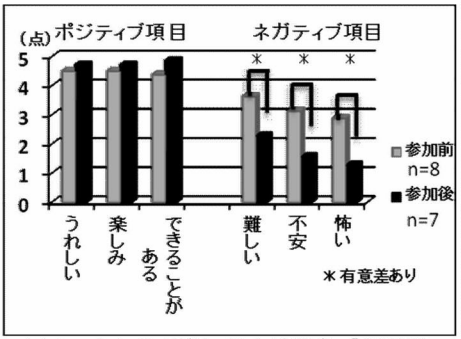

図 9．オムツ交換に対する印象「初産婦」

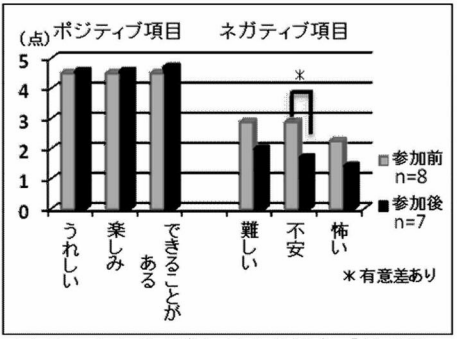

図 10．オムツ交換に対する印象「経産婦」

V．考察

結果から父と母、初産婦と経産婦では『児に対する想い』に相違はあるが、全体ではネガティブな想いが低下し、オムツ交換参加によって不安や怖さといった親役割葛藤は軽減することが明らかになった。オムツ交換に参加する前は不安を抱いていたが、実際に参加することで児を身近に感じ安心に繋がったと考える。参加前では「怖い」「小さい」という発言があったが、参加回数を重ねるごとに児の反応をみて声掛けや笑顔が増えた。このことからオムツ交換参加は愛着形成の一助になると考える。

父と母の『児に対する想い』の違いは、仁志田が「母親は、すでに父親より数歩も先に児への愛着を確立している。それに比べて通常多くの父親は、生まれたばかりの児を見て違和感を抱きがちで、すぐには愛情が生じにくい状態である。」[3)]と述べていることから、本質的に父と母では児に対して異なった関係にあるために生じた結果と考える。また初産婦と経産婦の『児に対する想い』の違いは、経産婦が正期産である上の同胞と早産である児を比較し、成長の違いや今後の育児の困難さを推測していることから生じた結果と考え

られる。本研究では経産婦の出産週数内訳を検討していないため今後症例数を増やすとともに、経産婦の出産週数の内訳における比較検討も行い不安の具体化を図る必要がある。

全体での『オムツ交換に対する印象』は好転したが、父と初産婦はオムツ交換に対してネガティブな印象が強いという結果が明らかになった。父と初産婦は育児経験が母親、経産婦に比べて少ないことによる技術面の戸惑いや不安の表れと考える。参加時は看護師がそばに寄り添い、オムツ交換に関する説明や声掛けを行って、親が安心してオムツ交換に参加できる配慮の必要性が示唆された。

また、親役割葛藤の「もっと何かしてあげたい」という欲求が変化しなかったことは児の成長とともに親が新たな課題や目標を見つけるためと考える。橋本は「親と子の関係性は相互作用の積み重ねによって発達を遂げていく。」[4] と述べており、親の新たな欲求は親子関係が築かれている証拠といえる。今後も早期接触やケア参加を促し、親子の関係性を築く機会を支援する必要がある。

Ⅵ. 結論

1. オムツ交換参加は児への不安・恐怖・罪悪感といった親役割葛藤の軽減に有効であった。
2. 親役割葛藤のひとつである「もっと何かしてあげたい」という欲求は親子関係の構築の表れと考える。
3. 父と母、初産婦と経産婦では児への想いに相違があることが明らかになった。
4. オムツ交換を含めた早期接触やケア参加の必要性が示唆された。

引用文献

1)3)仁志田博司：新生児学入門（第 3 版）,医学書院,P125-138,2007.
2)堀内勁：NICU チームで取り組むファミリーケア,MC メディカ出版,P10-14,2002.
4)橋本洋子：NICU とこころのケア（第 2 版）,メディカ出版,P15-21,2011.

参考文献

・重森晴美：NICU 初回面会時に母親が看護者に期待するケア,鹿児島県母性衛生学会誌,P4 - 7,2007.